

日本でのヤナギ属の葉形の用語

山口 純一¹⁾*Terms for leaf shape of the genus *Salix* in JapaneseJunichi YAMAGUCHI¹⁾*

要 旨

日本の図鑑では、ヤナギ属の葉形には5つの基本用語（線形、披針形、長楕円形、楕円形、卵形）が使われてきたが、改訂新版『日本の野生植物』のヤナギ科（大橋, 2016b）では披針形に代わって、「狭卵形」が用いられた。この経緯を知るために、用語の原語（英語、ラテン語）での葉形の範囲と対応する日本語の用語をまとめた。さらに江戸末期以降の日本の出版物で、葉形用語の範囲を記述と図から集めて、歴史的な経緯も含めて整理した。その結果、「狭卵形」は、SADT (1962a,b)による相称平面図形の用語での *anguste ovatus* に端を発し、清水 (2001) が「狭卵形(披針形)」としたものが大橋 (2016b) に継承されたと理解した。現在でも披針形はよく使われる用語であり、今後も狭卵形の同義語として用いるのが好ましいと考えている。また長楕円形と楕円形についても混乱があり、区別点である葉縁の形状が日本では徹底されていないこともわかった。最後にヤナギ属の葉形と用語の模式図をまとめて提案した。

キーワード: 狭卵形, 楕円形, 長楕円形, 披針形, ヤナギ属。

(2022年5月31日受付, 2024年10月23日受理, 2025年1月31日発行)

はじめに

日本での植物図鑑として平凡社『日本の野生植物』シリーズが27年ぶりに更新された。ヤナギ類を在野で研究している筆者は改訂新版『日本の野生植物 III』でのヤナギ科（大橋, 2016b）を読んでみると、既往の代表的な植物図鑑（牧野, 1940; 大井, 1953; 北村, 1979; 木村, 1989）で、ヤナギ属 *Salix* によく使われてきた葉形用語の「線形」「披針形」「長楕円形」「楕円形」「卵形」のうち、「披針形」の使用がなく、「狭卵形」という用語になっていることに気づいた（表1）。同書の「植物用語の図解」（大橋ほか, 2016）では、従来の「披針形」を「狭卵形(披針形)」としており、用語の変更の意味がわからず、困惑した。

大橋 (2016a) は、改訂新版『日本の野生植物』執筆にあたって、花序に関する用語 *peduncle* と *pedicel* の整理を行い、従来の「花柄」「小花柄」に代えて「花序柄」「花柄」とした理

由を示した。一方、「披針形」を「狭卵形(披針形)」とした説明は見あたらなかった。このため、ヤナギ属植物を中心に、これまでの葉形の学術用語とその範囲について整理し、「狭卵形」の由来についてまとめた。

以下の2つに分けて示して、大橋 (2016a) にならって議論する。

1. 葉形の学術用語と訳語
2. 日本の文献での葉形用語とその範囲

最後にまとめとして、ヤナギ属における葉形と用語の模式図を提示する。

1. 葉形の学術用語と訳語

分類学の学術用語は英語あるいはラテン語であり、西洋の近代植物学を体系的に紹介した『植学啓原』（宇田川, 1834）

¹⁾ 植物検索研究会 〒177-0045 東京都練馬区石神井台 5-25-25

* Corresponding author. E-mail: bluegrass-JY@nifty.com

表 1 代表的な植物図鑑でのヤナギ属に用いられた葉形の用語. ヤナギ属に関する本文・検索表などに使われている用語を5つの基本形に分けて示した.

植物図鑑	線形	披針形 [狭卵形]	長楕円形	楕円形	卵形
牧野 (1940)	線形	披針形	長楕円形	楕円形	卵形
	広線形	狭倒卵状披針形	狭長楕円形	広楕円形	
		狭長披針形	線状長楕円形	披針状楕円形	
		長披針形	広線状長楕円形	倒卵状楕円形	
		線状披針形	披針状長楕円形	卵状楕円形	
		卵状披針形			
		長楕円状披針形			
大井 (1953)	線形	披針形	長楕円形	楕円形	卵形
		線状披針形	狭長楕円形	倒卵楕円形	狭卵形
		広披針形	卵状長楕円形	広楕円形	卵円形
北村 (1979)	広線形	披針形	長楕円形	広楕円形	卵円形
		線状披針形	線状長楕円形	倒卵状楕円形	卵形
		線状倒披針形	倒卵状長楕円形		狭卵形
		長楕円状披針形	狭長楕円形		長楕円状卵形
		広披針形			
木村 (1989)	線形	披針形	長楕円形	楕円形	卵形
		線状披針形	狭長楕円形	広楕円形	長楕円状卵形
		狭披針形		倒卵状楕円形	
		倒披針形		披針状楕円形	
		広披針形		倒卵状広楕円形	
		長楕円状披針形			
		楕円状披針形			
大橋 (2016b)	線形	狭卵形	長楕円形	楕円形	卵形
		線状狭卵形	線状狭長楕円形	狭卵状楕円形	長楕円状卵形
		長楕円状狭卵形	狭長楕円形	狭楕円形	広卵形
			狭卵状長楕円形	広楕円形	
			狭卵状狭長楕円形	倒卵状楕円形	
			広長楕円形	卵状楕円形	
				倒卵状広楕円形	

以来, 先人が訳出してきた. 日本語訳の用語を検討する際には, 英語あるいはラテン語との対応を意識すべきである. 永益 (2009) は植物分類学者がラテン語記載に際して, Stern (1992) の『Botanical Latin』の用語を準拠すべきことを勧めている.

Stern (1992) は, Linnaeus (1751), Lindley (1841) などの著書, および Systematics Association Committee for Descriptive Biological Terminology (1962a, b) [以下, SADT (1962a, b) とする] を引用し, 葉形に関するラテン語および英語の学術用

語をまとめた. その中で, SADT (1962a, b) は, 単純な左右相称平面図形の基本形 9 種類 (縦横比 2:1~3:2) を定めて, 縦横比の違いを考慮し 95 種類の図形および 57 種類の用語を示した.

Stern (1992) の用語のうち, ヤナギ属の葉形に関係するのは, linear, lanceolate, oblong, elliptical=elliptic, ovate (ラテン語でそれぞれ *linearis*, *lanceolatus*, *oblongus*, *ellipticus*, *ovatus*) である. Stern (1992) の記述と縦横比を列記し, 明治期以降の文献でそれぞれ英語・ラテン語に対応する訳語を表 2 に, 葉

表2 ヤナギ属での葉形の5つの基本用語と和訳の対応. Stern (1992) が示した葉形用語 (英語・ラテン語) のうちの5つについて, その内容を示すとともに, 明治以降の日本の文献で示された, 英語・ラテン語に対応する訳語を一覧にした. —: 掲載なし. *1: *ovalis* への訳語として用いている. *2: 本文では「長円形」だが模式図では「長楕円形」を用いている. *3: 図 1E では, *anguste ovatus* (= *narrowly ovate*) に「狭卵形」との訳語を与えている. *4: 長方形, 矩形, 長楕円形, 長円形を列記している. *5: *lanceolate* は *narrowly ovate* と同じものとして, 狭卵形 (披針形) としている.

Stern (1992)					
英語	<i>linear</i>	<i>lanceolate</i>	<i>oblong</i>	<i>elliptical</i>	<i>ovate</i>
ラテン語	<i>linearis</i>	<i>lanceolatus</i>	<i>oblongus</i>	<i>ellipticus</i>	<i>ovatus</i>
記述	細長く 葉縁は平行	細い楕円で 先細り	楕円で 両端は鈍頭 葉縁は平行	楕円で 両端は鋭頭 葉縁は曲線	長楕円か楕円 下部が最広
縦横比	6:1~3:1	6:1~3:1	2:1~3:2	2:1~3:2	2:1~3:2
小野 (1873)	細長披針状	披針状	長楕円	楕円	卵形
小野 (1874)	——	披針状	長楕円	——	卵形
松原 (1878)	——	披針状	長円形	楕円形*1	卵形
松村 (1886)	線形	披針形	長楕円形	楕円形	卵形
白井 (1893)	線形	披針形	長円形 *2	楕円形	卵円形
濱 (1930)	線形	披針形	長楕円形	楕円形	卵形
牧野 (1940)	線形	披針形	長楕円形	楕円形	卵形
大井 (1953)	線形	披針形	長楕円形	楕円形	卵形
文部省 (1956)	線形	皮針形	長だ円形	だ円形	卵形
佐竹 (1964)	線形	皮針形	長だ円形	だ円形	卵形
原ほか (1965)	線形	ひ針形	長だ円形	だ円形	卵形
初島 (1976)	線形	皮針形	長楕円形	楕円形	卵形
豊国 (1987)	線形	皮針形*3	長方形など*4	楕円形	卵形
文部省ほか (1990)	線形	皮針形	長だ円形	だ円形	卵形
清水 (2001)	線形	狭卵形*5	矩形	楕円形	卵形
大橋ほか (2008)	線形	狭卵形*5	矩形	楕円形	卵形

形の模式図を図 1 にまとめた.

松村 (1886) 以降の訳語はほぼ安定しているが, 豊国 (1987), 清水 (2001) を契機に「狭卵形」や「矩形 (くけい)」が現れてきている. 両者は SADT (1962a,b) の左右相称平面図形を引用し (図 1E,F), 平面図形の基本形に縦横比を変えた図形に和訳を与えており, SADT (1962a,b) の手法を継承していることがわかる.

以下に, 基本用語5つについて個別に触れる.

線形 *linear* (*linearis*)

Stern (1992) は, *linear* (*linearis*) を “narrow, short, with the two opposite margins parallel” (細く短く, 両縁は平行) とし, SADT (1962a,b) の「*anguste oblongus*」= *narrowly oblong* に該当するとした. さらに細長い形状を「*fasciarius* (band-shaped)」と称し, SADT (1962a,b) の「*linearis*」に相当するとした. つまり, Stern (1992) の線形 *linear* は, SADT (1962a,b) の「*narrowly oblong*」(狭長楕円形, 縦横比 6:1~3:1) であり, Stern (1992) は, SADT (1962a,b) の線形を「band-shaped」(ひ

も形) と称し「縦横比 12 以上:1」としている. 豊国 (1987), 清水 (2001) は, SADT (1962a,b) に従っており, 同じ「線形」でも意味が違っている. 初期の訳語に「細長披針状」(小野, 1873) があるが, 以降は「線形」で安定している.

披針形 *lanceolate* (*lanceolatus*)

Stern (1992) は “narrowly elliptical, tapering [equally] to each end” (幅の狭い楕円形で, 両端は等しく先細りになる) とし, SADT (1962a,b) の「*anguste ellipticus*」(狭楕円形) に該当するとした. Stern (1992) の「*lanceolatus* (figs. 21, 106)」は最広部が中央であり, 「*anguste ellipticus*」に相当するものである. *lanceolate* の訳語は「披針形」あるいはその類義語で一貫しており, ヤナギ属の葉形の記述でもよく利用された語である.

SADT (1962a,b) は, 「*lanceolate* は, *narrowly elliptic* = *anguste ellipticus* (狭楕円形) と, *narrowly ovate* = *anguste ovatus* (狭卵形) の両方に使用されることがあり, 概念が曖昧」とし, 用語として *lanceolate* を示さなかった. 豊国 (1987) の用語集には *lanceolate* を披針形とした一方で, 巻末には SADT

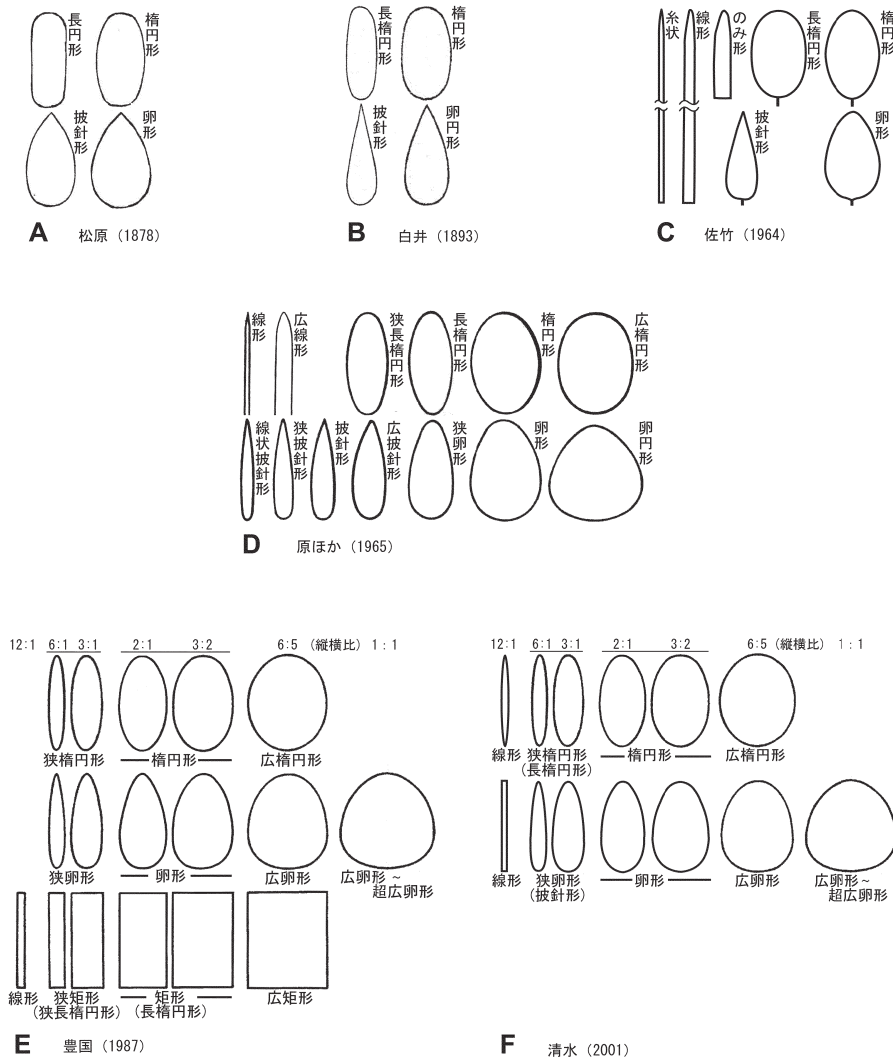


図 1 代表的な植物図鑑での葉形の模式図。ヤナギ属に用いられた葉形を再配列している。E および F は SADT (1962a,b) の左右相称平面図をベースにしている。縦横比が表記され、横線は範囲を示す。B の白井 (1893) の本文では linear 線形を言及しているが、図示されていない。

(1962a,b)の図を引用して *anguste ellipticus* を「狭楕円形」、*anguste ovatus* を「狭卵形」と訳出した。清水 (2001) も SADT (1962a,b) の図を引用しているが、「narrowly ovate (lanceolate) 狭卵形 (披針形)」としており、「狭卵形」を披針形と同義語とした。

ヤナギ属で披針形と呼んできた葉形では葉の中央部から下が最も広いと筆者は感じており、披針形＝狭卵形とした清水 (2001) は納得できるものであり、大橋 (2016b) はこれを継承したものであろうと理解できた。

長楕円形 oblong (*oblongus*)

Stern (1992) は“elliptical, obtuse at each end” (楕円で両端は鈍頭) とし、SADT (1962a,b) の「*oblongus*」に該当するとした。SADT (1962a,b) では、oblong の基本図形を「*rectangularis vel oblongus* (長方形または長楕円形)」に設定した。Stern (1992) はさらに、“the sides almost parallel” (葉縁はほぼ平行) としている。次に示す *ellipticus* 楕円形では葉縁は中央部から同じように曲がるとしており、長楕円形 oblong は幅の狭い楕

円形ではないことに注意すべきである。

oblong の日本語訳としては、小野 (1873) の「長楕円」が初出で、その後、この訳語ではほぼ一貫してきた。しかし、豊国 (1987) はラテン語辞書部分で、*oblongus* を「長方形、矩形、長楕円形、長円形」とし、SADT (1962a,b) を踏まえながら、伝統的に使われてきた「長楕円形」と松原 (1878) の「長円形」(図 1A) も併記した。大橋ほか (2008) も「長方形 (長楕円形、矩形)」とした。一方、清水 (2001) は oblong の訳語を「矩形」のみとした。

楕円形 elliptical, elliptic (*ellipticus*)

Stern (1992) は“elliptical, acute at each end” (楕円で両端は鋭頭) とし、SADT (1962a,b) の「*ellipticus*」に相当し、“with sides curved equally from middle” (葉縁は中央部から同じように曲がる) として、oblong との差異を示した。

elliptic の日本語訳は「楕円形」で安定しているが、先述の通り oblong との形状の差異には注意すべきである。清水 (2001) は narrow elliptic に対して「狭楕円形 (長楕円形)」と

したが、oblong の訳語の長楕円形と混同されるので、豊国(1987)のように狭楕円形のみをあてるのが好ましいと考える。

卵形 ovate (*ovatus*)

Stern(1992)は“oblong or elliptical, broadest at the lower end, so as to resemble the longitudinal section of an egg”(楕円形あるいは長楕円形で、下側の幅が最も広く、卵の形に似る)とし、SADT(1962a,b)の「*ovatus*」に該当するとした。ovate の和訳としては明治期から「卵形」で安定している。

以上のように、Stern(1992)と SADT(1962a,b)では葉形の学術用語とその意味には多少の差異があり、後者は lanceolate を用いていないのが特徴的である。日本語訳についても、Stern(1992)にほぼ対応している小野(1873, 1874)、牧野(1940)、大井(1953)に対して、SADT(1962a,b)を参照し

た豊国(1987)、さらに豊国(1987)の訳に「(lanceolate 披針形)」を加えた清水(2001)、大橋ほか(2008)などでは異なっている。大橋(2016b)は SADT(1962a,b)に準拠して、豊国(1987)の訳出した狭卵形を採用したのであろう。

2. 日本の文献にみる葉形の用語とその範囲

Stern(1992)の5つの基本用語の意味とその和訳を上記にまとめたが、これまでのヤナギ属の葉形で用いられていた範囲として、筆者はやや違和感があった。そこで宇田川(1834)以降の日本の文献から、葉形の用語が指す範囲を調べた。用語の解説を表3に、葉形のイラストを図2にまとめた。

以下、5つの用語およびその同義語ごとに論議する。

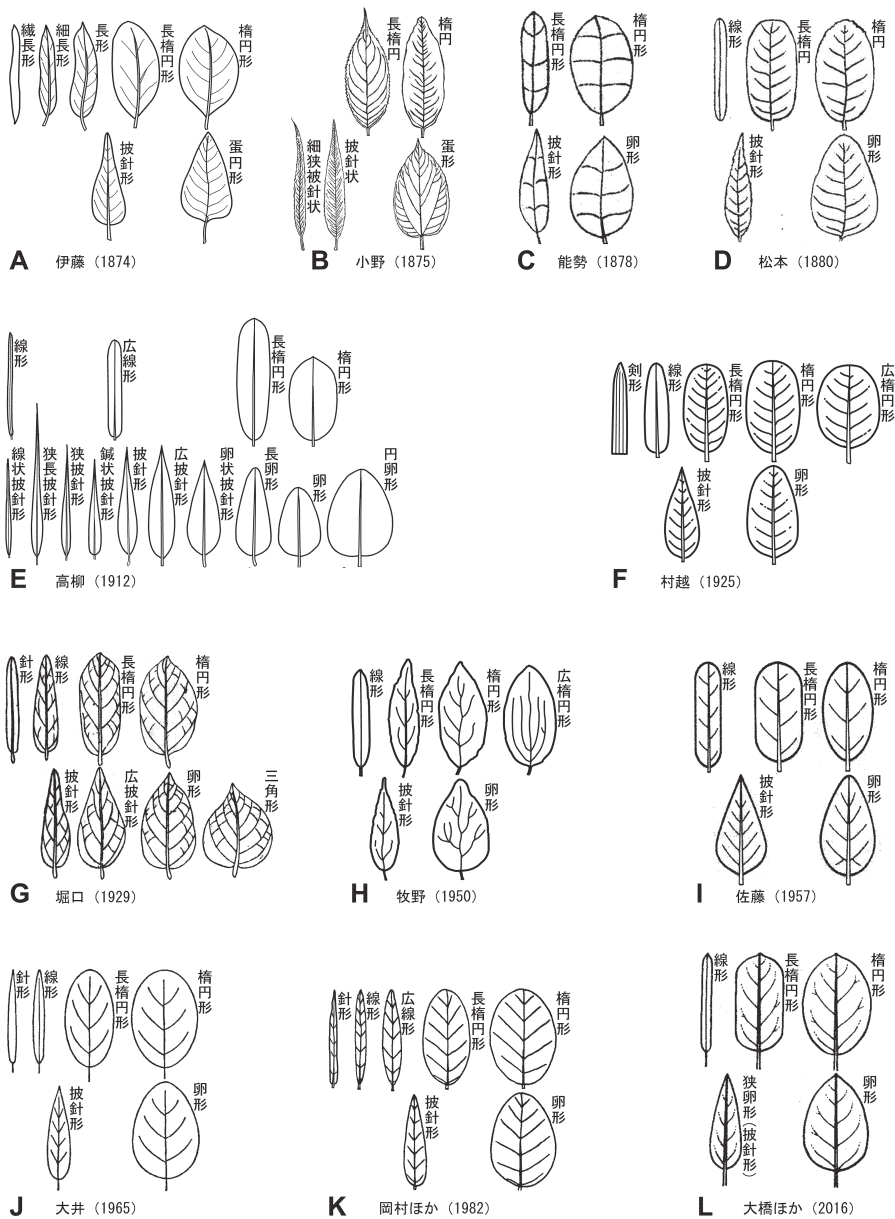


図2 明治以降の文献での葉形のイラスト。

表3 明治以降の文献での葉形の解説. 字体, 読点など一部変更した. []内は筆者記.

線形 (線状葉を含む)	
松本 (1880)	長サ幅ニ数倍シ上下殆ント広狭ナキモノ
松原 (1882)	其葉長広ノ比較ニ於テ長ノ甚勝リ, 其兩端中部共ニ同広ヲナシ, 只其上端ニ尖頭ヲナス
斎田・染谷 (1892)	狭キ葉片ノ兩側ガ殆ト平行スルモノ
三好・牧野 (1911)	極メテ狭瘦ニシテ, 兩縁ノ平行セル形
久米 (1937)	狭長で殆ど同じ幅の物をいふ
大井 (1953)	狭長で, 長さが幅より著しく長く, 兩縁辺が略平行の形を云ふ
初島 (1976)	細長い葉で長さは幅の4-5倍
披針形 (被針葉, 被針状葉を含む)	
小野 (1875)	長サ幅ノ三倍又四倍アリテ兩端ハ尖レリ
山口 (1876)	常ノ小刃針 (ランセッタ) ノ形ノモノ
永田 (1877)	葉先鋭ク尖リ葉脚潤ク, 其状殆ント被針 (ハバリ) ニ似タルヲ以テ披針状ト云フ
能勢 (1878)	卵形ヨリ細クシテ上部尖リタル者ナリ
松原 (1882)	[其葉長廣ノ比較ニ於テ] 其長之ヲ廣ニ比スレハ三倍若クハ四倍シテ兩端ノ尖レルモノ
安本 (1885)	[葉面の下部が廣く, 長さが幅に対し] 其三倍乃至四倍スルモノ
三好・牧野 (1911)	醫用ノ器ノ披針ニ類セル形ニシテ (中略) 兩端狭窄シ, 上部ハ下部ヨリモ狭シ
原ほか (1965)	先端がとがり中央より少し下部に最大の幅をもつ形, 外科手術に使うメスのような形
石戸 (1966)	針をひらく(披)という意味 (中略) 先はとがり (中略) もとのほうがいちばん幅が広い
初島 (1976)	先端はとがり下から3分の1ぐらいの所で最大の幅を有するもの
長楕円形 (長円葉を含む)	
小野 (1875)	長サ幅ノ二倍半アリ
松井 (1876)	小判ノ長キ形チヲナシタル葉ニテ
大館 (1876)	楕円状ノナホ一層ナガキモノヲサシテ云フ
山口 (1876)	常ノ楕円形ヨリ細長キモノ
岡村 (1877)	楕円状ヨリ稍細長キモノヲ云フ
松原 (1882)	其兩端同ク円形ヲナスト雖, (中略) 長ニ広ノ勝ルコト凡 (中略) 三倍以上ナリ
安本 (1885)	[長さが幅に対し] 其三倍乃至四倍スルモノ
三好・牧野 (1911)	長サハ幅ノ二倍ニシテ, 兩縁殆ト平行セル形
牧野 (1940)	楕円形ノ狭ク長キモノ, 其ノ兩側縁ハ多少相平行ス
大井 (1953)	長さが幅の3-4倍内外で, その兩縁が稍平行する
石戸 (1966)	楕円形よりやや縦に長い. もとも先もまるい. 幅はどこも同じくらい
初島 (1976)	楕円形を細長くしたもので長さとの比は1:3-3:5ぐらい
楕円形 (楕円葉を含む)	
小野 (1875)	長サ幅ノ一倍半又二倍アリ
大館 (1876)	ソノ形ナガクマロキテ宛然トシテ八厘錢ニ類似スルモノヲ概シテ然云エリ
山口 (1876)	飯櫃形ノモノヲイフ
永田 (1877)	葉ノ中央広張シ, 小判ノ形ニ似タルヲ云フ
松原 (1882)	其兩端同ク円形ヲナスト雖, (中略) 長ニ広ノ勝ルコト凡二倍乃至三倍
安本 (1885)	[葉面が] 長ノ幅ニ二倍スルモノ
三好・牧野 (1911)	長サハ幅ノ二倍ニシテ, 兩縁外方ニ湾曲セル形
牧野 (1940)	長楕円形ノ今少シ其ノ辺縁ノ張り出タルモノ
大井 (1953)	[長さが幅の3-4倍内外で, その] 兩縁がゆるやかに弧状に曲がるもの
石戸 (1966)	もとも先もまるいが, 縦に長い. 幅はどこも同じくらい
卵形 (卵葉を含む)	
伴 (1876)	卵ノカタチニ似タルヲ以テ名ヅクタル者ニシテ, 葉ノ形チ頭ホソク下ヒロク
岡村 (1877)	葉ノ本広ク葉ノ末狭クシテ, 恰も鶏卵ノ如シ
能勢 (1878)	卵ノ如ク下部広ク上部ニ至リ漸々狭シ
安本 (1885)	葉面ノ下部広クシテ, 其長ノ幅ニ二倍スルモノ
斎田・染谷 (1892)	葉片ノ長サガ其幅ニ殆ト二倍シテ, 其基脚ニ近キ部ノ最モ広キモノ
三好・牧野 (1911)	縦裁セル鶏卵ノ外形ニシテ, 下部ハ上部ヨリモ広闊ナリ
久米 (1937)	基の方は先の方よりも少々広く卵の如き形をしたものをいふ
大井 (1953)	外形が鶏卵の様で下半部幅広い形を指し

線形

「線形」は『植学啓蒙』(松本, 1880)が初出と考えられ(図 2D), 「線状葉」は同義語である。『植学略解』(伊藤, 1874)の「織長形」「細長形」「長形」(図 2A), および小野(1875)の「細狭披針形」(図 2B)などは, 線形に該当すると判断した。国内の文献の図では, かなり細い形には「針形」「糸状」, 線形に酷似する形状には「剣形」「のみ形」なども使われていたが(図 1C, 図 2F, G, J, K), 線形に含めてもよさそうである。

Stern(1992)の線形 *linearis* は葉の外形が細長く, 葉縁は平行, 縦横比は 3:1~6:1 としたが, 国内文献では縦横比が 6:1 より細長い図(図 2D, E, H, J, K, L)が多く, SADT(1962a, b)の *linearis* (縦横比 1:12 以上)に当てはまる。この形を Stern(1992)は「ひも形」*band-shaped (fasciarius)* としている。6:1 より広い図もあるが(図 2F, I), 時に「広線形」として, 牧野(1940), 北村(1979)などでも使われている(表 1)。

Stern(1992)は線形での両方の葉縁は平行とし, 日本の文献でも平行とした記述や図が多いが, 葉先に向かい葉身が狭まる葉形(図 2F, G)や, 葉縁が弧状に膨らむものもある(図 2K)。これらは表 1にある線状楕円形や線状披針形にあたることも考えられるが, 葉縁の直線部の長さによっても印象が変わってくる。清水(2001)は, 葉縁が弧状の図と平行の図をともに線形としている(図 1F)。

披針形と狭卵形

『植学啓原』(宇田川, 1834)には「柳葉の如きを〔披針〕と曰く」とある。「披針」は「披針」と同じで, 諸刃でとがった「披針(ハバリ)ニ似タル」(永田, 1877)ことに由来する。幅広い形状には「広披針形」(表 1, 図 1D, 図 2E, G), 幅狭い形状には「狭披針形」(表 1, 図 1D, 図 2E)が使われている。狭披針形のさらに幅狭い形状は, 細長く線形との中間的な「線状披針形」も使われている(表 1, 図 1D, 図 2E)。

narrowly ovate に由来する「狭卵形」は, 清水(2001), 大橋ほか(2008), 大橋ほか(2016)が披針形の同義語として用いたが, それ以前に, 原ほか(1965)は「披針形」と「狭卵形」を別形状として図示し(図 1D), 大井(1953)も別々に記述している(表 1)。

披針形は伝統的に用いられており, 現在でもよく使われている。改訂新版『日本の野生植物 III』(大橋ほか, 2016)での科別の解説では, 38 科(バラ科からセンダン科)のうち披針形に対応する葉形がない 9 科を除く 29 科では, おそらく分担執筆者の判断で, 披針形を用いられている。現状では, 「披針形」を継続して使い, 当面は同義語である狭卵形を併記するのが好ましいと筆者は考える。

長楕円形

oblong の和訳として長楕円形が使われているが, 先述した通り, 本来は単に細長い楕円形を意味していない。Stern(1992)は, *oblong* での葉縁がほぼ平行であるとし, 曲線とな

る *elliptical, elliptic* との違いを示した。SADT(1962a, b)では, *rectangularis vel oblongus* として, *oblongus* を長方形の系列の扱いにしている。

国内の文献では, 葉縁は「殆ど平行」(三好・牧野, 1911), 「多少相平行す」(牧野, 1940), 「稍平行する」(大井, 1953)などの記述や, 長楕円形の図(図 2C, D, E, F, G, L)では葉縁がほぼ平行しており, *oblong* に該当している。しかしながら, 和訳の「長楕円形」は細長い楕円形との誤解を受けやすく, 葉形の解説には長楕円形は楕円形より縦に長いとする記述も多い(表 3)。図でみると, 葉縁が平行でなく, 弧状の例もある(図 1D, 図 2H, J, K)。長楕円形と楕円形との重要な区別点である葉縁の形だが, 日本では徹底されてこなかったようである。

明治期には「長円形」(図 1A)があり, 「小判ノ長キ形」(松井, 1876)とも表現された。「長楕円形」は日本語として誤解されやすく, 「長円形」や「小判形」などの表現もありうるが, 長年慣れ親しんだ用語であり, このままを使わざるをえないだろう。

楕円形

『植学啓原』(宇田川, 1834)に「楕圓」の記述があり, 以降の文献では葉形の用語として「楕円形」ときに「楕円葉」が使われてきた。葉形解説(表 3)には, 縦横比について「一倍半マタ二倍」「二倍乃至三倍」「二倍」「3-4 倍内外」などがある。また, 葉の両側縁について「外方ニ湾曲セル形」(三好・牧野, 1911), 「其ノ邊緣ノ張り出タルモノ」(牧野, 1940), 「ゆるやかに弧状に曲がる」(大井, 1953)などとあり, Stern(1992)の楕円形(*ellipticus*)の記述と一致する。

Stern(1992)は「*ellipticus=ovalis*」とし「*oval*」と英訳したが, いくつかの植物図鑑では, 幅広い形に *oval* をあて「広楕円形」と訳出し, ヤナギ属解説では使用が多い。SADT(1962a, b)の「*narrowly elliptic*」に対して, 豊国(1987)は「狭楕円形」と訳出した。清水(2001), 大橋ほか(2008)も狭楕円形を採用している。清水(2001)は長楕円形を楕円形の系列とし, 狭楕円形と長楕円形を同義語としているが, 筆者は妥当ではないと感じている。

卵形

明治初期には蛋形(「蛋」は中国語の卵)とされ, 『植学啓原』(宇田川, 1834)以降, 上半部が幅狭く下半部が広い形に常に用いられてきた。卵形は記述・図とも *ovate* とよく一致する。卵形の幅広い形状には「広卵形」「卵円形」が使われてきた。卵形と卵円形を佐竹(1964)は同義語とし, 伊藤(1874), 白井(1893)の卵円形も卵形相当である(図 1B, 図 2A)。松村(1886)は卵円形を「丸卵なり」と述べた。三好・牧野(1911)は「広卵形」に対し「普通ノ卵形ヨリモ幅廣キモノ」と解説した。次に「卵円形」に対し「圓ミヨ帯ビタル卵形」と解説し, 高柳(1912)は卵円形として図示している(図 2E)。原ほか(1965)の卵円形は幅が著しく広い(図 1D)。細長い卵形の意で「長

卵形」があるが(三好・牧野, 1911), 近年の使用は少ない。

ヤナギ属の葉形の試案

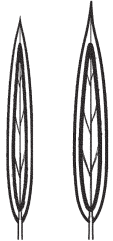
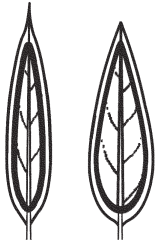
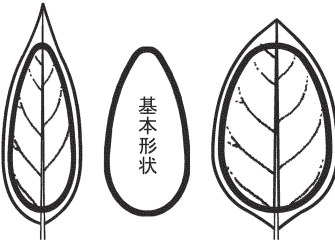
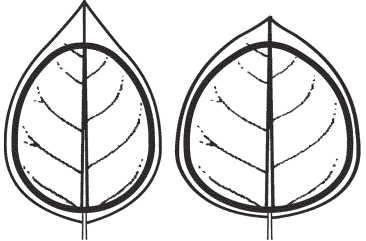
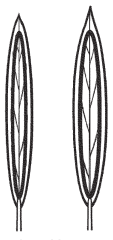
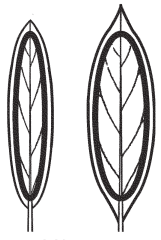
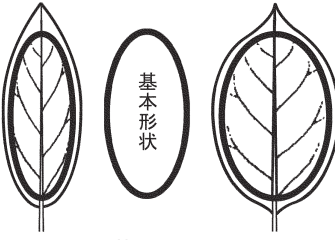
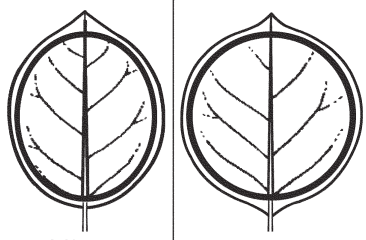
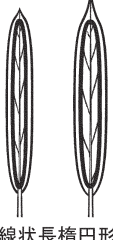
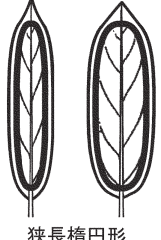
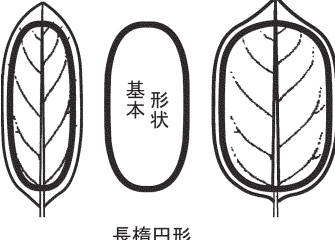
ヤナギ属で使う葉形の用語は, Stern (1992) が示した 5 つの基本用語, linear, lanceolate, oblong, elliptical=elliptic, oval およびその変形で十分と考える。しかし著者によってその範囲がさまざまであり, SADT (1962a,b), Stern (1992), および豊国 (1987), 清水 (2001) らの訳語を参照しヤナギ属の葉形とその

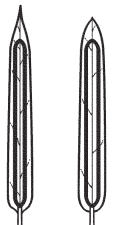
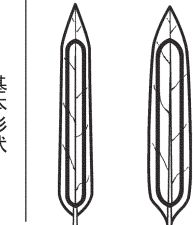
用語を整理して試案として図示した(図 3)。

それぞれの葉形の縦横比の範囲は SADT (1962a,b) とほぼ重なるものの, 筆者のこれまでの経験から, ヤナギ属で理解を得やすいと考えた縦横比で示した。

線形

幅が狭く長く, 葉身の側縁がやや平行な葉形を「線形」(縦横比 12:1~10:1)とした。線形の幅広い形状として「広線形」(縦横比 8:1~6:1)とした。

線状		狭		基準			広		
縦横比	10:1	7:1	5:1	3:1	5:2	2:1	3:2	6:5	1:1
 <p>線状被針形 または 線状狭卵形</p>		 <p>被針形 または 狭卵形</p>		 <p>卵形</p>			 <p>広卵形</p>		
 <p>線状橢円形</p>		 <p>狭橢円形</p>		 <p>橢円形</p>			 <p>広橢円形 円形</p>		
 <p>線状長橢円形</p>		 <p>狭長橢円形</p>		 <p>長橢円形</p>					

基準		広		
縦横比	12:1	10:1	8:1	6:1
 <p>線形</p>		 <p>広線形</p>		


参考 (倒形)			
縦横比	7:1	3:1	3:2
 <p>線状倒被針形 倒被針形 または 倒狭卵形</p>			

図 3 ヤナギ類での葉形の模式図。倒形は参考図形のみ掲載した。

披針形, 狭卵形, 卵形

葉身の中央より下側が最も幅の広い形状であり, SADT (1962a,b)の範囲をやや変更して, 縦横比 5:2~3:2 を「卵形」とし, 縦横比 6:5~1:1 を「広卵形」とした. 卵形より幅狭い縦横比 5:1~3:1 は, 「披針形」と「狭卵形」を同義語として列記した. 「披針形=狭卵形」より幅の狭い形は線形に近づくが, かなり幅の狭い卵形と見ることができ, これを「線状披針形=線状狭卵形」とし縦横比 10:1~7:1 とした. 表 1 に見るように既知の図鑑等でよく使われる用語である.

楕円形, 長楕円形

最広部が葉身の中央にあり, 葉身部分の両側縁が弧状になる形状の基本形を「楕円形」, 両側縁にやや平行な直線部分がある形状(葉身長さの 3 分の 1 前後より長い直線部を持つ形を想定した)の基本形を「長楕円形」とし, 上記披針形と同じ縦横比に照らし, 基本形の幅の狭い形状を「狭楕円形」「線状楕円形」「狭長楕円形」「線状長楕円形」とした. 幅広い形として「広楕円形」を示したが, 「広長楕円形」となる葉形はヤナギ属では見られないため図を省いた.

なお, 最広部が葉身の中央より上側にある場合は「倒形」として「倒披針形」「倒卵形」などとして用いられる. ヤナギ属の葉でも相当する種類があるので参考として図示した.

おわりに

改訂新版『日本の野生植物』の「狭卵形」という葉形が気になり, 学術用語(英語, ラテン語)の意味を確認してその和訳と葉形の範囲を調査しまとめた. 「披針形」は天保 5 年(1834) 発刊の『植学啓原』以来用いられ, 現在も多くの使用が認められている. 清水(2001)が披針形を除外しなかったように, 研究の継続性からも残ることを願う. 図 3 はあくまで試案であり, 役に立つことがあれば幸いである.

謝 辞

本稿をまとめるにあたり, 国立科学博物館 図書室スタッフの皆様には文献調査にお力添えを賜りました. 図の引用に関しては, 地人書館, 第一法規, 平凡社, 廣川書店, 至文堂, 八坂書房, 養賢堂の各社から使用を認めていただきました(ABC 順). 著作権保護期間外の文献各社を含め, ここに厚く御礼申し上げます. 鈴木武先生をはじめ「人と自然」編集委員会の皆様には, ご指導ご支援をいただきました. 多くの方々のご協力を賜り, 有難うございました.

利益相反

本研究を実施するにあたり, 特定企業との利害関係はありません.

引用文献

- 伴 源平 (1876) 博物図略解. 忠雅堂, 大阪.
 濱 健夫 (1930) 植物形態学講話. 中文館書店, 東京.
 原 寛・下村 孟・下郡山正巳・田中信徳・久内清孝・門司正三(編) (1965) 最新 植物用語辞典. 廣川書店, 東京.
 初島住彦 (1976) 日本の樹木. 講談社, 東京.
 堀口総一郎 (1929) 野外植物研究ノ栞. 堀口総一郎, 岡山.
 石戸 忠 (1966) 原色採集地別野外植物検索図鑑 1. 全国教育図書, 東京.
 伊藤 謙 (1874) 植学略解. 文部省, 東京.
 木村有香 (1989) ヤナギ科. 佐竹義輔・巨理俊次・原 寛・富成忠夫(編), 日本の野生植物 木本 I. 平凡社, 東京, pp. 31-51.
 北村四郎 (1979) やなぎ科. 北村四郎・村田 源(編), 原色日本植物図鑑 木本編II, 保育社, 大阪, pp. 303-340.
 久米道民 (1937) 植物学講義. 三省堂, 東京.
 Lindley, J. (1841) *Elements of Botany: Structural, Physiological, Systematical, and Medical*. Taylor and Walton, London.
 Linnaeus, C. (1751) *Philosophia Botanica*. Stockholm & Amsterdam.
 牧野富太郎 (1940) 牧野日本植物図鑑. 北隆館, 東京.
 牧野富太郎 (1950) 図説普通植物検索表. 千代田出版社, 東京.
 松原新之助 (1878) 植物名称一斑. 島村利助, 東京.
 松原新之助 (1882) 植物学. 文部省編集局, 東京.
 松井惟利(編) (1876) 博物図診解. 小松園, 東京.
 松本駒次郎(抄訳) (1880) 植学啓蒙 上. 文栄堂, 大阪.
 松村任三 (1886) 植物学語鈔. 丸善, 東京.
 三好学・牧野富太郎(編) (1911) 普通植物検索表. 文部省, 東京.
 文部省 (1956) 学術用語集 植物学編. 大日本図書, 東京.
 文部省・日本植物学会 (1990) 学術用語集 植物学編 増訂版. 丸善, 東京.
 村越三千男 (1925) 大植物図鑑. 大植物図鑑刊行会, 東京.
 永益英敏 (2009) 学名のラテン語(1). 日本植物分類学会ニュースレター, 33, 14-15.
 永田方正 (1877) 博物教授解 植物之部. 岡田茂兵衛, 大阪.
 能勢 栄(訳編) (1878) 中学植物学 初編. 細謹社, 岡山.
 岡村はた・橋本光政・室井 緯・家永善文・藤本義昭・平畑政幸・前田米太郎 (1982) 新訂 図解植物観察事典. 地人書館, 東京.
 岡村 邁 (1877) 博物図教授書—附 問答法 卷之一. 鳩居堂, 兵庫.
 小野職愨(選) (1873) 博物図 第 1 図. 文部省, 東京.
 小野職愨(訳) (1874) 植学訳筈. 文部省, 東京.
 小野職愨(編訳) (1875) 植学浅解 初編. 文部省, 東京.
 大館正材(註解) (1876) 小学博物図解. 文泉堂, 大阪.
 大橋広好・邑田 仁・岩槻邦男 (2008) 植物の用語図説. 牧野富太郎(著)・大橋広好・邑田 仁・岩槻邦男(編), 新牧野日本植物図鑑. 北隆館, 東京, pp. 1265-1275.
 大橋広好 (2016a) 植物学用語 peduncle と pedicel の日本語用語. 植物研究雑誌, 91, 195-204.
 大橋広好 (2016b) ヤナギ科. 大橋広好・門田裕一・邑田 仁・米倉浩司・木原 浩(編), 改訂新版 日本の野生植物 III. 平凡社,

- 東京, pp. 184–208.
- 大橋広好・門田裕一・邑田 仁・米倉浩司・木原 浩(編) (2016) 改訂新版 日本の野生植物 III バラ科～センダン科. 平凡社, 東京.
- 大井次三郎 (1953) 日本植物誌. 至文堂, 東京.
- 大井次三郎 (1965) 改訂新版 日本植物誌. 至文堂, 東京.
- 齋田功太郎・染谷徳五郎 (1892) 植物形態学. 敬業社, 東京.
- 佐竹義輔 (1964) 植物の分類—基礎と方法—. 第一法規出版, 東京.
- 佐藤正己 (1957) 有用植物分類学. 養賢堂, 東京.
- 清水建美 (2001) 図説植物用語事典. 八坂書房, 東京.
- 白井光太郎 (1893) 中等植物学教科書. 金港堂, 東京.
- Stern, W. T. (1992) *Botanical Latin*. Timber press, Portland.
- Systematics Association Committee for Descriptive Biological Terminology (1962a) II. Terminology of simple symmetrical plane shapes (chart 1). *Taxon*, 11, 145–156.
- Systematics Association Committee for Descriptive Biological Terminology (1962b) IIa. Terminology of simple symmetrical plane shapes (chart 1a), addendum. *Taxon*, 11, 245–247.
- 高柳悦三郎 (1912) 植物図解—普通植物検索表準拠. 正文館・興風舎, 東京.
- 豊国秀夫 (1987) 植物学ラテン語辞典. 至文堂, 東京.
- 宇田川榕庵 (1834) 植学啓原 卷之一. 須原屋伊八, 江戸.
- 山口松次郎 (1876) 博物図教授法 甲号. 竜章堂, 大阪.
- 安本徳寛(編) (1885) 植物書. 製紙分社, 東京.